

## 小木地区の地域振興

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00064077">https://doi.org/10.24517/00064077</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 9. 小木地区の地域振興：「能登小木イカす会」を中心とした分析

岡田 優太

1. はじめに
2. 小木の地域振興
3. イカす会について
4. イカす会と地域住民の関わり
5. 小木の地域振興のこれから
6. おわりに

### 1. はじめに

本章では、小木地区の地域振興について、中心的なイベントである「能登小木イカす会」（以下「イカす会」とする）を取り上げる。イカす会が開催されるまでの経緯や新旧比較から、小木地区でのイカす会の立ち位置の変化について分析する。そして、聞き取り調査のデータを基に、小木の人びとや地域組織とイカす会との関わりを明らかにし、小木地区においてイカす会がどのような役割を果たしているのかを検討する。最後に、小木地区で現在進められている地域振興策について触れ、その可能性をイカす会との繋がりから考察していきたい。

### 2. 小木の地域振興

まず、この節では、小木の地域振興がいかに行われているのかを、能登町の様々な行政計画をもとに記していく。

#### 2.1 能登町第二次総合計画

能登町は、2005（平成 17）年に町村合併により誕生してから、第一次総合計画に基づき様々な施策を実行してきた。そして、計画期間が満了する 2016（平成 28）年 3 月を迎えるに当たって、新たに平成 28（2016）年度から平成 37（2025）年度までの 10 年間の計画期間となる第二次総合計画を策定した。『能登町第二総合計画』（2016）によると、まちづくりの基本目標を「人をつなぎ、地域をつなぎ、未来（あす）へつなぐまちづくり」と掲げ、その実現に向けて 7 つ施策の大綱が明記されている<sup>1</sup>。計画策定にあたっては、広く町民の声を拾い上げるために、町民アンケートやパブリックコメントの募集などを実施し、多面的に策定に活かす努力がなされている。特に能登町では、農林水産業といった第一次産業が中心となっており、少子高齢化に伴う産業人口の減少が懸念されるため、産業振興に向けての支援が必要とされている。また交通網の発達により、石川県内外から多くの観光客が訪れる一方で、人口流出による過疎の問題が深刻化する恐れがある。そのため地域の魅力を活かした交流イベントの強化、交流人口、移住定住者

<sup>1</sup> 能登町『能登町第二総合計画』（2016）。

の増加を促す施策も、能登町第二次総合計画では重要な施策として位置付けられている。

## 2.2 能登町観光マスタープラン

能登町では、2007（平成19）年3月に「能登町観光マスタープラン」を策定し、10年間の観光の取り組みを進めてきた。そして2018年から新たに、上位計画である『能登町第二次総合計画』や観光の現状を踏まえ、今後10年間の観光プランが策定された。

『能登町観光マスタープラン』（2018）では、「人とまち・自然の魅力が出逢い 活力あるまちへ」を観光振興テーマとして掲げ、観光振興の方針として4つ挙げられている。特に小木地区に関係するのは2つ目の方針「ブランド戦略により“顔”のある観光まちづくり」を進める、というものである。観光に対する現在の課題として「日本海側最大のイカ水揚げ地として栄えてきた小木のイカなどの様々な観光資源があるものの、その魅力が全国に十分に周知されていない」といった点が挙げられており、ブランド戦略を通じたさらなる能登町への誘客が目指されている<sup>2</sup>。石川県内だけでなく、北陸新幹線の開通といった観光を取り巻く環境の変化に対して、能登町魅力をいかに発信することができるのか、現状として抱えている課題の解決に結びつけることができるのかといった視点で、観光プランが明確に定められ、実行へと繋がるような努力がなされている。

## 2.3 小木地区における着眼点

能登町の『能登町第二総合計画』や『能登町観光マスタープラン』を踏まえて、小木地区における地域振興の着眼点について考察する。小木地区は九十九湾に面した地域であり、小木イカを中心とした魅力の発信が行われている。けれども課題として挙げていたように魅力が十分に伝わっていないといった現状がある。小木地区における地域振興では、いかに情報発信を通じた魅力の共有が出来るかが鍵となるだろう。また人口減少の課題があり、交流人口の増加は『能登町観光マスタープラン』の観光振興テーマに掲げられているように「人とまち・自然の魅力が出逢い」うことにより、「活力あるまち」づくりに繋げていくことが目指されている。小木地区においても単に誘客するだけでなく、持続的なまちづくりへと繋げていくことができるか、交流人口や移住者の増加に繋げられるかも含めた地域振興を行っていく必要がある。そのような着眼点のもとで小木地区の地域振興は企画・運営されていることが考えられる。次節以降は、イカす会を中心に小木地区の地域振興を検討し、現在進められている小木地区での地域振興政策との関係から、その可能性について論じていきたい。

## 3. イカす会について

この節では、小木地区の地域振興にとって中心的なイベントであるイカす会について記述する。そして、イカす会の新旧比較や復興までの経緯から、現在のイカす会がどのような目的で開催されているのか、明らかにする。

<sup>2</sup> 能登町『能登町観光マスタープラン』（2019）。

### 3.1 イカす会の概要

「イカす会」は能登町小木港特産のイカをアピールするイベントであり、イカ釣り漁船が出港する6月最初の大安の前に、石川県漁業協同組合小木支所で開催される。大漁祈願の意味合いも込められており、写真1のように会場には色とりどりの大漁旗が掲げられている。小木地区の様々な組織や団体が出店し、地元の名産品を販売したり、小木の地域活動をPRしたり、地域一丸となってイベントを盛り上げている様子が見える。



写真1 能登小木港イカす会2019での大漁旗

(2019年5月26日 筆者撮影)

イカす会では、朝獲れイカのつかみどりや一本釣りを体験できるだけでなく、会場内にある炭火焼コーナーで地元の水産物を食することもでき、小木の名産を丸ごと楽しむことができる。また、イカを解剖してイカの生態を学ぶコーナーやイカ釣り漁業体験航海、イカ釣り漁船の内部見学なども存在し、地元の子どもの地域学習や海洋教育としての側面も有している。2019年度は主催者発表で、11,000人が来場した。小木地区のみならず、能登町においても重要な観光イベントとして位置付けられている。

### 3.2 イカす会の誕生から一時終了まで

現在のイカす会は、復興によってリニューアルされたものである。2019年度は復興して7回目の開催となったが、年々来場者数は増加している。復興前のイカす会はこのようなものであったのか、これまでの経緯について簡単に触れていく。

イカす会は、1988(昭和63)年から「産業フェスティバル」として、イカの町小木をPRするために始められた。当時のイカす会は、いろいろな出し物があり、イカダレースやカラオケ大会など、運動会や学芸会をミックスしたようなイベントであった<sup>3</sup>。ま

<sup>3</sup> 能登町『広報のと 第7号』(2015)より。イカす会のスケジュールの中に、「イカダレース」「カラオケ大会」の記述があった。イカダレースはデコレーション部門とレース部門があり、そ

た、地域外への PR のためだけでなく、地元民の親睦を深めるためのイベントとしても機能していた。しかし、漁業の衰退や資金獲得の弱体化に加え、2004（平成 16）年の町村合併に伴う補助金の削減により、運営が難しくなり、2008（平成 20）年の開催を最後に、イカす会は一時終了してしまう。

### 3.3 イカす会復興までの経緯

イカす会を復興しようという動きが高まったのは 2012（平成 24）年のことである。当時は水揚げ量や船数の減少による漁業の衰退、商店の減少や人口流出といった連鎖的な問題が深刻化するのみならず、イカす会のような地元の魅力をアピールする手段も欠いていた。通学路の草刈りボランティア活動での会話をきっかけに「イカのまち小木」の誇りを取り戻そうと小木地区の有志が集まり、2013（平成 25）年に能登小木港スマイルプロジェクトを結成、イカす会の復興に向けて動き始めた。

まずは自分たちができることから始めようと、当時流行していた AKB48 の「恋するフォーチュンクッキー」に合わせてみんなで踊ることを小木地区で進めていった。また、同年の 10 月 27 日には小木地区活性化センターの駐車場を主会場に、「ミニミニイカす会」を開催した<sup>4</sup>。予算は少なく小規模であったものの、地元民の繋がりが生まれたことやメディアに取り上げられたことが、地元内外での知名度を上昇させた。「ミニミニイカす会」の成功は、地元の人たちに小木がイカの有名な町であるということを知りさせることに繋がり、イカす会復興へのさらなる原動力となった。そして、翌年の 6 月 1 日、現在と同じ石川県漁業協同組合小木支所において「復活！能登小木港イカす会」として再スタートを切ったのである。

### 3.4 能登小木港スマイルプロジェクト

ここでは、イカす会の運営について運営母体である能登小木港スマイルプロジェクトを中心に記述する。能登小木港スマイルプロジェクトは先述の通り、2013 年に発足し、イカす会の運営を中心に小木地区の地域活性化を目指している。実行委員会において意思決定が行われ、現場での指揮を事務局が担う形となっている。旧イカす会は、行政に実行委員会と事務局が置かれ、行政のイベントとしての側面が強かった<sup>5</sup>。しかし、現在のイカす会は地域で運営するという横の繋がりを重視したものとなっている。そのため、実行委員会のメンバーは小木地区の主要な組織である小木区会、小木公民館、県漁協小木支所、内浦商店連盟、婦人会、青壮年連合会それぞれからの代表者で構成されている<sup>6</sup>。また行政職員も運営に携わっているが行政組織として関わるよりも個人として関わる傾向にある。

---

れぞれ 3 位まで賞金が出される。両部門にエントリーすることを条件に参加賞として賞金が与えられる。

<sup>4</sup> 能登町『広報のと 第 106 号』（2013）。

<sup>5</sup> 能登町『広報のと 第 6 号』『広報のと 第 7 号』（2005）より。掲示板にイカす会の出店社募集の記事があり、「イカす会事務局（商工観光課内）」と記述があった。また、イカダレース出場者募集の記事にも「イカす会実行委員会（商工観光課内）」と記述があった。

<sup>6</sup> 資料としていただいた「2019ver.能登小木港スマイルプロジェクト実行委員会」を参照した。

これまで、イカす会の概要と経緯、そして運営母体である能登小木港スマイルプロジェクトについてまとめた。現在のイカす会が「イカのまち小木」をPRするだけでなく、地元民にとって誇りとなるように、地域学習としての側面も含めながら、小木地区の様々な組織の合同で運営されていることが明らかとなった。次節では、イカす会に携わっている小木の人びとが、どのような思いで参加しているのか、聞き取り調査の結果をまとめて記述し、小木地区におけるイカす会の重要性について考察する。

#### 4. イカす会と地域住民の関わり

この節は、主に小木地区での聞き取り調査の結果から、イカす会と地域住民との関わりについて多面的に考察していく。まずは、イカす会復興に尽力した行政職員への聞き取りから、イカす会の復興に向けて重視したポイントをまとめる。そして、様々な地域組織がどのような関わり方をしているのか、それぞれのメンバーや関係者への聞き取りから明らかにし、小木地区におけるイカす会がどのような位置づけなのかを考察していく。

##### 4.1 イカす会復興に向けて

Hさん（庄崎第一、男性、43歳）は、旧イカす会の事務局を役場が担っていたため、元々役場の仕事としてイカす会に関わっていた。2008（平成20）年の開催を最後にイカす会が終了し、2009（平成21）年3月には水産高校小木分校<sup>7</sup>が閉校、Hさんは、小木地区においてシンボルとなるものが失われてしまったことに危機感を覚えていた。そこで、前節で触れたように、小木地区の有志を集めて、能登小木港スマイルプロジェクトの発足とイカす会の復興に尽力したのである。Hさんはイカす会の復興に当たって、以下の3つのポイントを重視したという。1つ目は、イカを食すだけではない体験型のイベントにする、ということである。イカす会では、イカのつかみ取りやイカの解剖の授業など様々な体験型ブースが設けられており、小木がイカのまちである、ということを様々な角度から知ることができる。2つ目は、地域で運営し、町民が活躍できる舞台づくりをする、ということである。現在のイカす会は、町民のサポートが無ければ運営することができない。小型の漁師さんがイカを釣ってきて、生け簀に入れて準備してくれることにより、イカのつかみ取りが実施できる。イカ釣り漁船の見学では、船頭さんが普段誰も入れてくれないブリッジの中を公開してくれる。また地元のおばあちゃんが炭火焼きやイカ料理を提供する。そして、子ども達による鼓笛隊のパレードや高校生による書道パフォーマンスがイカす会を盛り上げる。このように地域全体で運営し、様々な町民がそれぞれのノウハウを活かすことができる場づくりがイカす会には醸成されているのである。3つ目は、イカす会を持続させるために教育との連携を強化する、ということである。小木地区にある小木小学校は、2011（平成23）年に海洋教育の特例校に認定され、里海科という特別科において小木の漁業や里海の生態系などを学んでいる。

<sup>7</sup> 石川県立能都北辰高等学校小木分校のこと。

イカす会においても、小学6年生と中学3年生が石川県の調査船白山丸に乗り、イカ釣り漁業の漁業体験航海を体験する<sup>8</sup>。また金沢大学の臨海実験施設や里海教育研究所と連携して、イカの解剖による学習コーナーを設けている。このようにイカす会において、地域というものを教材としながら学びを深めていくことで、地域に対する誇りや愛着を養ってほしいという思いが込められている。

役場職員である T さん（東町第三、男性、44 歳）と K さん（下浜第二、男性、44 歳）はともに地元が好きで、U ターンで地元に戻ってきた。H さんと同様に、水揚げ量の減少や小木港の船数の減少、小木地区の人口減少など、深刻化する地元の衰退に対して、地元を元気にしたい、アピールしたい、子どもにここで生まれてよかったと思えるようにしたい、との思いから、イカす会の復興を目指したという。能登小木港スマイルプロジェクトの発足当時は、近江町市場に向かいイカの PR 活動を行ったり、運営資金を集めるためにイカの商品開発を行ったりした。イカす会を地域で運営するために、イカす会への出店は能登町の業者を優先し、前年度のイカす会に出店した業者も優先するという。さらに、飲食を提供する町内に対しては、イカを使うことを努力義務としており、イカす会のコンセプトを明確なものとする努力がなされている。

## 4.2 イカす会と地域組織

次に、イカす会と関わりのある地域組織について、主に能登小木港スマイルプロジェクトの実行委員会を構成する地域組織を中心に取り上げ、それぞれの関係者やメンバーへの聞き取りから、イカす会との関わり方についてまとめていく。

### 4.2.1 青壮年連合会

青壮年連合会は、1985（昭和 60）年頃、小木中学校の教員が地域に「子ども達を見守ってほしい」と働きかけて、町内の若手衆を集めてつくられた任意団体である。当時の小木地区はまだ漁師町として栄えていたため、家庭に父親がいないことも多く、気の激しい子どもや社会人になって間もない若者が多かった。そのため、健全なる活動を地域で見守っていくために、青壮年連合会は発足された。本来は町内の親睦を深める団体であったが、祭りの担い手世代と重なることもあり、様々な行事に顔を出している。現在は、青壮年連合会の設立当時より、子どもの数が少なくなり、活動の目的とするところが変わりつつある。子ども達に能登での生活の良さを伝えていくために、とも旗祭り<sup>9</sup>など伝統の継承や地域学習にも力を注いでいる。イカす会が復興できたのも青壮年連合会のような小木地区の若者が集う場が存在していたことが大きい。現在のイカす会では、青壮年連合会がブースを設けて飲食を提供するだけでなく、中心メンバーがイカす会の

<sup>8</sup> 能登町『広報のと 第 113 号』（2014）。

<sup>9</sup> 小木の氏神御船神社の春祭りで、海の安全を祈願する祭りである。毎年小木地区と柳田地区の中学校の新 3 年生が、とも旗祭りの旗を 2 月頃から作成し、担当する町の青壮年連合会が主に生徒をサポートしている。公民館長をはじめとした地域住民からも旗祭りについて学ぶ機会も設けられている。

準備や設営、当日の運営を行ったり競技の進行を務めたりしている<sup>10</sup>。

K<sup>2</sup>さん（下浜第二、男性、61歳）は、当時の中学校の教員で、現場の声を地域に届けて青壮年連合会の発足に尽力された。K<sup>2</sup>さんは漁業に従事する家庭で育ち、父親は船頭として多くの乗組員を抱え、母親が番屋でご飯や洗濯をまかなっていた。まだ氷と塩で魚を保存した時代で、魚の蓄えが少なく、頻繁に行き来を繰り返していた。昭和40年代に船内冷凍が開発され、長期漁が可能になったという。漁業に関わる仕事をされているK<sup>2</sup>さんは、海洋教育にも力を入れており、現在の大和碓でのイカ釣り漁業の現状を地元の子ども達に伝えるために現場に赴き、その体験談を語っている。現在はイカ釣り漁業に従事する者は少なくなったが、昔は半分以上が漁師となり、これまでも海の恩恵が小木の町を成り立たせていた。K<sup>2</sup>さんは、そういった同じ思いを町民が共有しているからこそ、イカす会のイベントが成り立つのではないかと語っていた。

H<sup>2</sup>さん（下浜第二、男性、40歳）は、Hさんと共にイカす会復興に尽力された方で、役場職員でない人として能登小木港スマイルプロジェクトに関わった。H<sup>2</sup>さんの祖父はイカ釣り船の修理をする鉄工所を営んでいたこともあり、イカと共に生活があった。地元小木のために協力したいという思いが、行動を起こさせたという。青壮年連合会の中心メンバーであるH<sup>2</sup>さんは、地元の子ども向けのイベントを企画したり、家族世代の交流や若者の繋がりづくりにも尽力されたりしている。現在、小木地区で進められている都市整備計画やイカの駅にも携わられており、これからの小木地区の地域振興に向けてSNSでの情報発信を続けている。小木地区の都市整備計画やイカの駅については、次節で詳しく紹介する。

#### 4.2.2 内浦商店連盟協同組合

小木地区には元々、小木商店連盟が存在していたが、約20年前に松波地区の商店街が解散したのをきっかけに、小木商店連盟が松波の商店振興会を吸収するかたちで新たに内浦商店連盟が発足した。昔から、イベントの企画やコンサートを主催したり、様々な取り組みを行ったりしてきた。なかでも小木地区はキャッシュレス化の先駆けとして有名で、1998（平成10）年頃からポイントカードによるキャッシュレス化を実施、2018（平成30）年にはポイントカードを更新して、お年寄りや地元の小学生の見守りシステムも導入された。

旧イカす会では小木商店連盟が中心となって運営していたこともあり、イカす会の復興の際には会員のメンバーがノウハウを伝えたり、イカす会に内浦商店連盟のブースを設けて飲食を提供したりしている。Iさん（庄崎第二、男性、63歳）は内浦商店連盟の中心メンバーとして、ひまわりカード<sup>11</sup>の導入や街路灯のLED化、アクリル看板の設置

<sup>10</sup> 資料としていただいた「イカす会2019 会場配置図」「イカす会2019に係る役割分担」を参照した。

<sup>11</sup> ひまわりカードは2018年に新たに導入されたプリペイドカードで、従来のポイントカードの機能に加えて、小学生や高齢者の見守り機能が導入された。小学生は登下校時にカードタッチすることで、保護者に通知メールが届く。高齢者の見守り機能は、数日間買い物していない状態が



などを手掛けられた。イカす会の復興の際には、当時の運営のノウハウを若手に教え、現在でも個人的にイカす会に関わっている。また、T<sup>2</sup>さん（高浜第二、男性、80歳）は、イカす会を復興する際に、婦人会に企画の提案をされた。現在では内浦商店連盟として、めった汁や焼きイカなどの飲食を提供している。T<sup>2</sup>さんは、青壮年連合会のメンバーが色々と関わるため、若者に譲ろうというスタンスを取られている。内浦商店連盟も青壮年連合会と同様に、会員全体がイカす会に関わるというよりも個人的に関わるといった緩やかな連携で繋がりがあがる。

#### 4.2.3 小木校下婦人会

小木校下婦人会は、1949（昭和24）年に設立し、現在に至るまで長い歴史がある地域

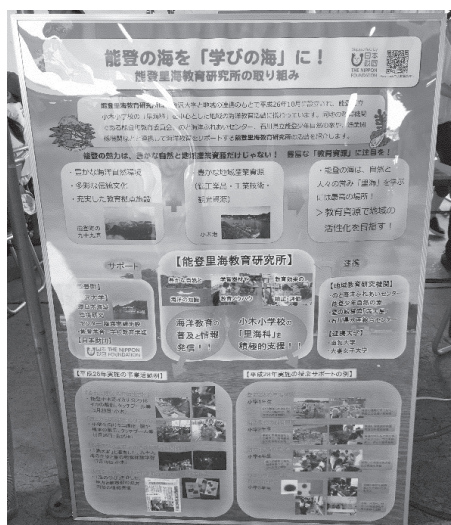


写真2 能登里海教育研究所の取り組み 写真3 配布されていた『イカのほん』  
(写真2、3ともに2019年5月26日 筆者撮影)

組織である。現在の会員数は250名で年々減少しているものの、盆踊りやイカす会、ボランティア活動など様々な地域活動に尽力している<sup>12</sup>。イカす会では婦人会がブースを設けて、イカを使った料理を提供して、来場者に振る舞っている。

Mさん（下浜第四、女性、79歳）によると、イカす会の復興に向けて能登小木港スマイルプロジェクトが始動した際に、運営資金を集めるためにクラウドファンディングを取り入れたという。集まったお金に対する返礼品として3000円の寄付に対して、イカの甘酢漬けを2本プレゼントし、3000円より多くの金額を寄付してくれた方には地酒も付け加えたという。イカの甘酢漬けを作る際には、Mさんが近所に声掛けして料理した。また、Mさんはイカ料理会というイカ料理の研究会を開いており、イカ料理の継

続く、指定の連絡先に通知が届くようになっている。

<sup>12</sup> 小木校下婦人会についての詳細は、第5章を参照のこと。

承に取り組んでいる。実際にイカ料理の講習会を能登町の高校生を対象に開催したり、小木小学校での里海科でもイカ料理について教えられたりしている。

#### 4.2.4 海洋教育

小木地区には、海洋教育研究施設として金沢大学環日本海域環境研究センター臨海実験施設<sup>13</sup>と一般社団法人 能登里海教育研究所<sup>14</sup>が存在している。役場職員の H さんがイカす会の復興に向けてポイントとして挙げた「教育との連携」は、現在のイカす会において重要な役割を担う。2019 年度のイカす会では、写真 2 のように、能登里海教育研究所のブースにおいて活動を紹介するボードが掲示されていた。2018（平成 30）年には、能登里海教育研究所と能登小木港スマイルプロジェクト実行委員会が協力して、写真 3 の『イカのほん：能登の里海 海のいきものガイドブック』を発行し、イカす会などで配布している<sup>15</sup>。地元の漁師やイカ釣り漁業に従事する人にも協力を得て、小木のイカ釣り漁業の歴史や特徴などを詳しく記述している。さらに、イカがどのように食されてきたのか、イカ料理についてもイカ料理会のメンバーを中心にまとめられている。

K<sup>3</sup> さん（東町第一、女性、39 歳）は、イカの研究のために小木に移住され、研究を進めるだけでなく、里海科のコーディネーターとして教育の現場と地域とのつなぎ役にもなられている。イカす会に向けての事前調査として能登町内の小学 5 年生を対象にアンケート調査を実施し、小木がイカのまちである、ということがどれほど認知されているのかを明らかにした。能登町は里山里海と多様な自然に囲まれているため、里山地区ではあまり知られていないことが明らかとなった。イカす会だけでなく、里海科での地域学習にも海洋教育研究施設が連携することによって、地域を軸とした専門的な学びを深められるだけでなく、地域の働き手との交流から、地元に対する愛着や誇りの醸成が期待される。

#### 4.3 イカす会の存在意義

これまで、小木地区の地域組織とイカす会との関わりについてみてきたが、それぞれの地域組織が密に関係しているわけではなく、個々のメンバーが自ら役割を持って関わり合っていることが明らかとなった。現在のイカす会は、2013（平成 25）年の「ミニミニイカす会」から数えて 7 回開催されているが、来場者数 1 万人を超えるイベントへと成長し、地域イベントとして定着しつつある。H さんは、イカす会の成功について、そのような地域組織の緩やかな繋がりが生まれたことが要因となったのではないかと振り返る。元々、行政が運営の中心となったイカす会を地域全体で運営していくという方針は、これまでイカす会に関わってきた地域組織のメンバーだけでなく、イカと共に生

<sup>13</sup> 金沢大学環日本海域環境センター臨海実験施設は、教育関係共同利用拠点の中心施設であり、実習用の小型船舶や宿泊棟も整備されている。金沢大学の臨海実習がここで実施されるほか、全国の国立大学・私立大学の臨海実習も行なわれている。

<sup>14</sup> 2015 年度より文科省の教育課程特例校の指定を受けて海洋教育に取り組んでいる石川県能登町立小木小学校の支援を中心に、学校教育における海洋教育モデルの実現を目指している。

<sup>15</sup> 一般社団法人 能登里海教育研究所『イカのほん：能登の里海 海いきものガイドブック』（2018）。

活がありその恩恵を受けてきた地元の人に対しても行動を起こさせた。能登小木港スマイルプロジェクトとして始動したムーブメントは、外的なメディアによる評価も伴い、小木の肯定的なイメージを地域内外に広める力となり、イカす会の復興へと結びついていった。そして、これからの世代へと持続的な繋がりを持たせるための努力がなされているのである。

小木地区において、イカす会は地域の人がそれぞれの役割を發揮し、活躍できる場であり、地域外に対しては「イカのまち小木」を発信できる場でもある。小木地区におけるイカす会は地域振興イベントでありながら、小木地区のコミュニティの緩やかな繋がりを構築するための地域活動でもあり得るのである。

## 5. 小木の地域振興のこれから

この節では、小木地区の地域振興において課題とされていることをまとめながら、現在進行している都市再生整備計画について触れ、イカす会との関係性から、これからの地域振興の可能性について論じていく。

### 5.1 現状と課題

小木地区は主要産業である漁業の衰退に伴い、人口の流出が避けられない地域であり、様々な地域活動を運営していくにも人手不足となっている。小木地区の若者が集まる組織である青壮年連合会には色んなところから声がかかり、祭礼はもちろんのこと、イカす会や数々の地域活動に尽力している。けれども、青壮年連合会のメンバーもそのことを分かっているが役割を引き受けているといった現状があり、なかなか解決に結びついていないところがある。イカす会の運営も同様に中心メンバーが固定化し、持続的な繋がりの構築が喫緊の課題となっている。

小木地区の地域振興の課題として、地理的条件が影響を及ぼしているところがある。小木地区は九十九湾に面した自然豊かなエリアであるが、金沢方面からのアクセスがしにくいエリアでもある。小木地区の祭礼であるとも旗祭り<sup>16</sup>や小木袖キリコ祭り<sup>17</sup>、地域イベントのイカす会といったものは一定の集客が見込めるものの、年間を通した持続的な集客という点では難しいところがある。イカす会のような「イカのまち小木」を丸ごと知ることのできる体験型イベントがあったとしても、単発イベントとして消化されてしまうといった現状がある。もちろん、地域住民にとってはそれ以上の価値があるイベントであるのだが、持続的な運営や誘客に繋がる工夫が必要とされている。このような課題があるなかで、小木地区では 2015（平成 27）年から都市再生整備計画が進み、「イカの駅」といったイカを発信する道の駅の建設や小木地区の主要道路の整備が行われている。最後に内部で関わっている方への聞き取りをまとめて、小木地区の地域振興

---

<sup>16</sup> 注 9 を参照のこと。

<sup>17</sup> 毎年 9 月の第 3 土日に能登町小木地区全域で開催されるキリコ祭りで、奴凧のような行燈が特徴である。袖キリコには迫力ある絵が描かれ、漁師町ならではの迫力がある。

の可能性について考えていきたい。

## 5.2 小木地区都市再生整備計画

能登町のホームページに、都市再生整備計画事業についての紹介がされていたため、ここで引用すると、都市再生整備計画事業とは「地域の歴史・文化・自然環境等の特性を活かした個性あふれるまちづくりを実施し、全国の都市の再生を効率的に推進することにより、地域住民の生活の質の向上と地域経済・社会の活性化を図ることを目的とした制度」<sup>18</sup>である。小木地区で進められている都市整備計画は基幹事業として位置付けられており、地域交流センターのようなまちの基幹となる施設の整備に関する事業である。

能登町（2019）によると、小木地区の都市整備計画の目標は、「イカのまち小木」の発信による交流人口の増加と持続的なまちづくりを進めていくもので、以下の3つのポイント、①観光交流の増加、②居住人口の向上、③賑わいの創出、が目指されている<sup>19</sup>。具体的には観光交流施設である「イカの駅」の整備により、九十九湾の豊かな自然を活かした体験型イベントによる観光振興を目指し、観光交流の増加に繋げていく。レストランでは地元の名産である小木イカを使った料理を振る舞い、特産品販売所では町内のお店の直売所を設けて、地元の雇用創出や産業振興を図る。

観光交流施設の整備や運営のメンバーである Y さん（庄崎第一、男性、39 歳）は、「イカの駅」がオープンまであと1年という段階で関わり始めたが、まだコンセプトの議論に終始している現場に危機感を覚え、すでに委員会にメンバーとして関わっていた H<sup>2</sup> さんと共に会社の運営と資金の工面に尽力された。Y さんは地域活動において商売は特にビジョンを明確化しないといけないとして、地域活性化事業であるイカす会などを「イカの駅」へと結び付けることを視野に入れている。また、イカの駅でのビジョンを明確化し、獲れる時季が限定されるイカを、どのくらいの値で買い、どのくらいの人数を見込み、どのくらいの値段で売するのか、といった具体的な策を考えることも必要である。単発イベントではなく長期的な視野で考え、人とお金の仕組みづくりをチームで運営していくことが重要となる。

小木地区において、「イカの駅」に対する期待感の高まりを見せている。H<sup>2</sup> さんは、イカの駅が地元の人に働く場所を提供することで雇用を創出するだけでなく、地元の人に手料理を振る舞ってもらうことが郷土料理の継承に繋がるのではないかと語る。また、役場職員の T さんと K さんは、道路が整備されることで「イカの駅」を目当てに小木を訪れる人が増えるのではないかと期待感を述べている。特に小木地区において気軽に小木イカを食べられる場所が無かったため、「イカの駅」ができることにより、より多くの人に小木イカが認知されるのではないかと観光交流増加の可能性についても言及されていた。

<sup>18</sup> 能登町ウェブサイト「都市再生整備計画について」

<sup>19</sup> 能登町『都市再生整備計画（第4回変更）小木地区』（2019）。

### 5.3 地域振興の可能性

最後にイカす会との関連から小木地区の地域振興の可能性について考察していく。イカす会では地域全体で運営する方針に基づき、能登小木港スマイルプロジェクトは地域組織のメンバーそれぞれが実行委員として関わっている。そしてイカす会の運営については、それぞれの地域組織のメンバーが役割を持って関わり、緩やかな繋がりによって成り立っている。また、持続可能な運営を目指すために、教育との連携も視野に入れながら、地域づくりの一側面としての役割も担っている。役場職員のHさんは、今後の地域振興のあり方として、行政は輪を広げる土台をつくり、その上で町民が主役となるイメージを想定している。現在の規模を大きくすることよりも、地域活動のプレーヤーを増やしていくことが重要であり、イカす会を様々な地域活動の出発点として活用して欲しいと語る。

これまで、イカす会は小木地区の地域イベントとして定着し、新たなイカす会においても教育と連携すること、体験型のイベントとしたことにより、地域外にも広く浸透した。けれども、単発イベントとして消化されてしまう課題も同時に存在している。地域活性化イベントとしてのイカす会を観光交流施設の「イカの駅」へと結び付けることが、持続的な誘客に繋がるだけでなく、地元民の雇用創出や活躍の場の構築といった魅力発信にも通ずることが期待されるのではないかと。イカす会の復興時には外的なメディアによる評価が、地元民の小木に対するイメージを肯定的なものへと変化させた。「イカの駅」も同様に SNS などを有効活用し、認知度を高めていくことが外的な評価へと繋がり、地域内での魅力の創出にも影響することが考えられる。特に能登町では多様な意見を取り入れ、地域振興へと繋げていくために学域連携に力を入れ、大学生のインターシップを引き受けている。実際に、大学生が提案したプロジェクトが実行されている事例も存在している<sup>20</sup>。小木地区の地域振興を多面的に考えることは、持続的なまちづくりを目指していく上で必要不可欠なことである。地域組織の緩やかな繋がりそれぞれのメンバーが活躍できる場づくり、そして持続的な運営の仕組みづくりと移住者や交流人口といった外側の視点の導入、それらを地域全体で応援するといった土壌の醸成がさらなる魅力を生み出し、持続可能なまちづくりへと結びつくのではないだろうか。

## 6. おわりに

これまで小木地区の地域振興についてイカす会を中心にみてきたが、それぞれのメンバーが地域に愛着を持ち、「イカのまち小木」を様々なかたちで発信していることが分かった。小木地区はイカ釣り漁業で発展を遂げ、直接イカ釣り漁業に関係した仕事についていなくとも間接的にその恩恵を受けてきたことは、小木地区の人びとにとって共通

---

<sup>20</sup> 地元の酒造は「小木のイカに合う日本酒」という大学生の提案を受けて、新商品の開発に尽力した。また郷土料理の掘り起こしを行ったインターシップ研修生もあり、伝統的なイカ料理の継承について課題を示していた。

認識として残っているのではないだろうか。今回の聞き取り調査でも、そのような思いからイカす会の復興に携わったり、現イカす会の運営、さらに新たな地域振興策である「イカの駅」にも関わったりしているメンバーが数多く見られた。それぞれが自ら役割意識を持って取り組んでいる姿が印象深く、いかに持続させることができるのか、キーパーソンとなり得る彼らを中心に、多様な人びとをつなげられるかが重要となるのではないだろうか。

最後に今回の調査実習では、小木地区の数多くの住民の方が突然の訪問や電話にも関わらず、快く対応・協力してくださった。特に、小木地区の地域振興について、イカす会に携わられている方々への聞き取りの際には、メンバー同士と繋げていただき、貴重な時間を割いて聞き取り調査にご協力いただいた。イカす会に関する資料だけでなく、様々なご協力をいただいたことに深く感謝し、厚くお礼申し上げたい。小木地区は2020年春の「イカの駅」オープンに向けて積極的に動き始めている。今回様々なかたちで調査にご協力いただいた小木地区のますますの発展を願い、小木地区の地域振興がよりよいものとなるように今後も見守っていききたい。